故郷第五場面　読んだ読んだ

三年三組　氏名

ある寒い日の午後、わたしは食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、振り向いてみた。思わずあっと声が出かかった。……わたしは身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。わたしは口がきけなかった。

ある寒い日の午後、ルントウは、来た。主人公は一目で分かったが、昔とは変わり果てた姿だった。身なりからしてルントウは生活に困っていそうでもある。話しかけようとしたが、言いたいことが言えずに、「よく来たね」。あまりに寂しい言葉しか出せなかった。それを聞いたルントウも、会えてうれしいのと、何て言えばいいのか分からなくなって、『だんな様……』と変に敬う言い方をした。三十年ぶりに会い、もっと楽しい会話をしたかった。しかし、長年の年月を経て、二人の間を隔ててしまったのである。

くん

主人公は、背丈も顔も目も、頭や身につけている物も、手も全身全てが昔とは似もつかなく変わってしまったルントウを見て、感激で胸がいっぱいになった。思い出話がしたかったが、今のルントウは経済的に苦しい状況におかれているため、そんな話をするのは気まずく似つかわしくなかったのだ。そのため、三十年ぶりの再会の始めの言葉が「ああルンちゃん――よく来たね……。」だった。ルントウも何かを言おうとしたが、口には出ず、うやうやしい態度で『だんな様！……』と言っただけだった。主人公は「シュンちゃん」と呼んでくれなかったことに悲しくなって、二人の間が隔たってしまったのを感じて、身震いした。

さん

主人公は、食後の茶でくつろいでいると、後ろにルントウがいた。その姿は子供の頃とはずいぶん変わり、手、顔、目、背……つまり全体ががらりと変わっていた。たくさんの変わったところを細かく時間をかけてみて、ルントウはヤンおばさんのように経済的に苦しくなったことが感じられる。主人公は感激して、どう口をきけば良いか、思案がつかずに「ああルンちゃん――よく来たね……。」と、緊張して台詞を棒読みするかのように言った。また主人公は、ルントウの外見があまりに変わりすぎて……かつての思い出話をすることができなかった。ルントウは、「だんな様……」と以前は主人公と対等、もしくは少し上のような態度であったが、主人公よりも下と見ている。主人公は、自分のことなのに、「身震いしたらしかった。」と他人のように言った。かなりショックを受けていることが感じられる。

さん

主人公は、あのころとは似もつかないルントウの姿を見て、やはりルントウもヤンおばさんと同じで、経済的に苦しい問いことを悟った。久しぶりに再会し、主人公は感激で胸がいっぱいになり、チアオチー、跳ね魚、貝殻、チャーなどの昔の思い出を語ろうとしたが、経済的に苦しいのにそんな明るい話はできず、気まずさから思い出話が出せなかった。また、「だんな様！……」という言葉を聞いて、主人公は、二人の間に大きな壁ができてしまったと思い、悲しさから身震いしてしまった。

さん